

聖書：使徒 25：13～27

説教題：イエスが生きている

日時：2014年9月14日

パウロはエルサレムからカイザリヤへと護送されて、次の導きはいつ与えられるかと日々待っていたことでしょう。しかし総督ペリクスのもとで、2年間も待ちぼうけを食らわされました。そして 25 章で総督がペリクスからフェストに代わります。新しい動きが起こるかもしれないと期待したであろうパウロでしたが、ふたを開けてみると状況は一層悪い方向に傾き始めました。このままではエルサレムに引き戻されてしまいそうな状況がありました。そこでパウロはやむなくカイザルに上訴します。パウロは先にイエス様から「あなたはローマでもあかしをしなければならぬ」と言われていたのですが、何と囚人としてローマに向かうことこそ、主が備えたもう道だったのです。

さて、これが実行に移されるまでにはある程度の期間があったようです。今日の箇所にはアグリッパ王とベルニケの表敬訪問のことが記されています。このアグリッパ王はヘロデ・アグリッパ 2 世のことです。使徒の働き 12 章で、使徒ヤコブを剣で殺したヘロデ・アグリッパ 1 世の息子です。アグリッパ 2 世はパレスチナの北東部に領地を与えられていました。その彼と一緒にここに出て来るベルニケは、彼の年下の妹でした。一度結婚しましたが、夫の死後、兄と一緒に生活していました。この二人が新総督フェストに挨拶をしにやって来たのです。属国の民としてこのような礼儀は当然尽くさなくてはなりません。一方のフェストにとって、これは都合の良いことでもありました。この後に記されますが、フェストにとってパウロを巡る騒動は、どのように判断すべきか見当がつかないことでした。しかしヘロデ家は長くユダヤを支配して来た家として事情に詳しいはずです。この時のユダヤはローマ総督の下に置かれていたとは言え、アグリッパ王はエルサレムの宮の管理と大祭司の任命権を与えられていました。そこで彼にパウロのことを話し、何らかの意見をもらおうとしたことが、まず 13～22 節に記されています。

まずフェストが話していることは、パウロに罪は見当たらないということです。「私がエルサレムに行った時、祭司たちとユダヤ人の長老たちが、その男のことを訴え出て、罪に定めるように要求した。しかしそこで私は『被告が、彼を訴えた者の面前で弁明する機会を与えられないで、そのまま引き渡されることはローマの慣例ではない』と答えた。」彼はこうしてローマの公正さをアピールします。そして「訴える者たちが集まった時に私は即座に裁判を開き、パウロを出廷させた。しかし予期していたような犯罪は一つもなかった。」と述べます。これはこれまでも繰り返し確認されて来たことです。コリントでユダヤ人が訴えを起こした時も、

地方総督ガリオは、私がさばくようなことは何もないと言いました。このカイザリヤでも前任者ペリクスはパウロにさばくべき罪はないと判断していたので何もませんでした。

では問題は何なのか。フェストは 19 節で、それは彼ら自身の宗教に関することで、その争点は死んでしまったイエスが生きているとパウロが主張していることにあると言っています。23 章 6 節：「兄弟たち。私はパリサイ人であり、パリサイ人の子です。私は死者の復活という望みのことで、さばきを受けているのです。」24 章 21 節：「彼らの中に立っていたとき、私はただ一言、『死者の復活のことで、私はきょう、あなたがたの前でさばかれています。』と叫んだに過ぎません。」 フェストは詳しい内容は良く分かりませんでしたが、パウロの主張はここにあるということだけは分かっていました。しかしこれをどう理解したら良いのか見当がつかないので、エルサレムで私の前で裁判を受けることを願うかとパウロに尋ねた。するとパウロはカイザルに上訴した。そこで私は彼を保護しているのです、とフェストは話します。こうして何かアグリッパから意見をもらいたいとフェストは思っていたのでしょう。

するとアグリッパは、「私も、その男の話を知りたいものです。」と言います。これこそフェストが待っていた答えです。「それでは明日、ぜひ彼の話聞いてください」と言います。そしてアグリッパ王の前でのパウロの弁明が 26 章に記されることとなります。今日の箇所はそれに先立ち、パウロの論点を明らかにする役割を果たしています。すなわちパウロのメッセージの中心は、イエスが生きているという点にあるということです。

この章の残りの部分は、翌日のパウロの弁明直前までの様子を記したものです。「翌日、アグリッパとベルニケは、大いに威儀を整えて到着し」と 23 節にあります。彼らは自分たちの立派さ、豊かさ、権力の大きさを見せびらかします。彼の父アグリッパ 1 世は、きらびやかな王服を着て登場し、人々から「神の声だ、人間の声ではない」とへつらいの言葉を受けて、虫にかまれて死にましたが、あの息子らしく、豪華絢爛な衣装をまとうて人々を圧倒します。王としてのパフォーマンスを見せつけます。千人隊長や市の首脳者たちに付き添われながら。そんな中、パウロが引き出されて来ます。その姿は何とみすぼらしかったことでしょうか。富んでいる者とあわれな者。豊かな者と貧しい者。権力を手にして栄えている者と、その下にあつて何の輝きもない者。こうした状況の中でパウロは弁明することになります。マタイの福音書 10 章 18 節：「あなたがたは、わたしのゆえに、総督たちや王たちの前に連れて行かれます。それは、彼らと異邦人たちにあかしするためです。」

フェストはまずパウロの紹介をします。「アグリッパ王、ならびに、ここに同席の方々。ご覧ください。ユダヤ人がごぞつて、一刻も生かしてはおけないと呼ばわり、エルサレムでも、ここでも、私に訴えて来たのは、この人のことです！」と。そして続けます。「私としては、彼は死に当たることは何一つしていないと思います。しかし、彼自身が皇帝に上訴しましたの

で、彼をそちらに送ることに決めました。ところが、彼について、わが君に書き送るべき確かな事が一つもないのです。」そしてこれがカイザルに書き送るべき何らかのことが得られる機会となりますようにとの希望を述べます。もし私たちがこの時のパウロの立場にあつたらどうかでしょうか。目の前にはこの世の権威者が座っています。華やかな衣装を身にまとい、自らの豊かさ、繁栄ぶりを誇示しています。その前で何も持っていない自分。あまりにもみすぼらしい自分。そこで何かを話すことなどできるものでしょうか。ところがパウロはここで大胆に自分の信仰についてあかしします。なぜそんなことができたのでしょうか。それは彼が主張する「イエスが生きている」という信仰に彼が本当に生きていたからではないでしょうか。

イエスが生きている。このことがなぜそんなにも大事なのでしょう。これはこれを信じる者にどんな違いをもたらすのでしょうか。これが意味する一つ目のことは、ここに罪の赦しの明確な証拠があるということです。イエス様の復活は、イエス様個人にだけ関わる出来事ではありません。イエス様の復活は、私たちの罪をその身に背負って死んだお方の復活です。ですからここには、私たちの罪は確かに精算されたというはっきりした証明があるのです。いくらイエス様が私たちの身代わりに十字架にかかったと言っても、この復活がなければ、そのわざは本当に成功したのかどうか、誰にも分かりません。しかしイエス様は、その十字架の死を通して支払うべき私たちの罪の代償を完全に支払い切ったから、その条件を満たし切ったから、父なる神はイエス様をよみがえらせなされた。つまりここに父なる神は、キリストにより頼む者の罪は今や赦されている！という公の宣言をしておられるのです。ローマ書4章25節：「主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。」

またイエス様の復活が意味する二つ目のことは、私たちの人生は今や死で終わるものではなくなくなったということです。人間はみな必ず最後は死にます。どんなお金持ちも、どんなに優秀な頭脳を持つ人も。死は私たちにとって最後の敵です。ところがこの死より強い人がいた！死に打ち勝っているのに生きている人がいる！この方にあつて、死で終わらない世界が人類に対して開かれた。この方により頼む者も、同じように永遠の命に生きることができる。もし死ですべてが終わりになるなら、この世の人生は結局空しいものです。何かを目指して一生懸命取り組んでも、志半ばで生涯を閉じることになるかもしれませんし、ある程度のことを成し遂げても、死によってそれは私からは失われます。ですから私たちにできることはせいぜい、生きている間に少しでも楽しく過ごすこと。「明日は死ぬのだ。だからさあ飲み食いしようではないか。」ということになる。しかし今やキリストにあつて死で終わらない世界が開かれています。確かに今なお地上にあつて私たちは様々な死の威嚇に取り囲まれています。病気、事故、老化、……。しかしそれらに決して負けることはなく、最後はすべてに打ち勝って永遠の命

に生きる者となる。このことを本当に信じるなら、私たちは恐れずに日々を生きることができ
ます。この自分の地上の生は天国における永遠の生へとつながっていることに慰められ、確信
を与えられて、いのちの心配をして日々を過ごすより、神に喜ばれる歩みをするようにと心を
高く上げて生活することができるのです。

そしてイエスが生きている！という告白が意味する三つ目のことは、今日も生きておられる
天地の主との交わりの内に私たちは生きるということです。イエス様は過去の人ではありません。
今日も生きておられます。どこか遠くに生きているのではなく、私たちと関わって生きて
おられます。いやただ関わっているというレベルではなく、天地一切の主権を持っている方と
して、また十字架と復活を通して私たちを最後の救いにまで導く完全な力と恵みを持っている
方として関わってくださる。その方が今日も生きておられて、私たちと交わり、上から守り、
豊かに養い育ててくださる。ヨハネの福音書1章16節：「私たちはこの方の満ち満ちた豊かさ
の中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである。」生けるこのイエス様との交わりの内に
生かされているということこそ、地上を歩む私たちの慰め、力、希望です。パウロはこのこと
をしっかりと仰ぎ見ていたので、臆することなく、王たちや総督たちの前でも語ることができた
のではないのでしょうか。

興味深いことは23節の「威儀」と訳されている言葉は、ギリシャ語では「ファンタシヤス」
という言葉で、英語のファンタジーとかファンタスティックという言葉のもとになったもので
す。つまりアグリッパとベルニケは大いに威儀を整えて自分たちを誇って見せましたが、それ
は一時的なファンタジー、夢や幻のようなものでしかないということです。それは一時的なシ
ョーにしか過ぎず、やがては消え行くはかないものでしかない。確かに彼らが誇った栄光は今
どこにあるでしょうか。それに対して人間の目にはみすばらしくも見えたパウロの方こそ、見
せかけではない、いつまでも続く真の高貴さを持っていました。そういう者として、彼はあか
しして行くのです。

私たちは「イエスが生きている」という告白の内に慰めを頂いているのでしょうか。力を得て
いるのでしょうか。誇りを抱いているのでしょうか。イエスが生きておられるので、この方により
頼む私の罪は赦されている。イエスが生きておられるので、この方を信じる私も死で終わらな
い永遠の命に生かされている。イエスが生きておられるので、この方により頼む私は、天から
の力強い守りと祝福の中を歩むことができる。私たちはパウロのように、これこそを自らの第
一の喜びとして日々を歩みたい。過ぎ行くこの世のファンタジーに心奪われて心乱す者ではな
く、「イエスが生きている」ことに私のすべての幸いを見い出し、人々にこの救いを宣べ伝える
歩みへ遣わされてまいりたいと思います。